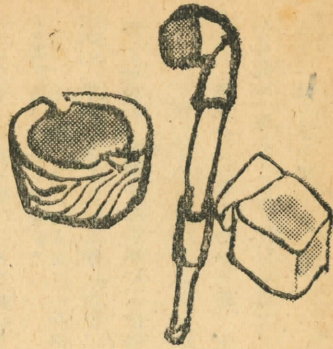


名指導者 (その二)

木谷蓬吟



義太夫節の始祖竹本義太夫は「口傳は師匠にあり、稽古は花鳥風月あり」と訓へてゐる。このエッセンスをつかんで實行に移したのが、前述の五世竹本彌太夫の指導ぶりであつた。それがその職にある玄人の太夫たちだけでなく、一般素人の稽古人に對しても何等の差別なしに均霑されてゐた。

天満市場の長老で名望家の三木魚勢氏は、嚴父三木三木氏と父子相次いで、素人淨瑠璃の重鎮で、文才画才があり俳句にも達した高識の人であつたが、その當時の某誌上に「彌太夫師の提灯教育」を草されたが、さすがに奇

警な觀察であると思つた。それは私は、前後五年ばかりの間、彌太夫の教へを受けたが、師の稽古ぶりを考へてみると、全く他の師匠たちとは、その根本から趣を異にしてゐたそれにつき私は「提灯と教育」といふことに思ひ當つた。

師は、玄人素人、老功初心の分ちなく、どんな人がやつてきても、先づその人の持つ力量のほどを測つてから、さて、その一步前……二歩前でも三歩前でもない……から教へた。決して五歩も六歩も離れて教へないのである、ちようど提灯の灯が、わ

づかに一步前の足もとを照らすやうに、初歩の者には二歩、五歩の者には六歩前といふ標準で導いて行た。すなはち、五歩進めば六歩、六歩進めば七歩から指導した。從て誰れでも彼れでも捉へられる、つかむことができる、進んで行けるのである。一般師匠の稽古は、その初歩者でも担当老功者でも、一律の教授様式で教へるから、所謂、遠い距離の灯の光りで、捉へることもつかむことも出来ない、それで腹に入らないから藝も進まないといふことになる。然かし、こうした教授法は、よほどその道に達成の人で、更に誠意と親切と熱情の持主でなければ不可能である。師のやうな名匠であり、心からの誠實と熱愛があつてこそ可能なので、何人でも出来ると思へば間違ひである。

師はまた、この道の口傳とか秘訣とか、謂はば奥義皆傳なるものを、惜氣なく教示される。これには他の師匠や太夫たちも驚異の目を見張つてゐた。師は總ての稽古人に對して、皆が皆その技藝の進歩し向上することを熱望してゐられたからに外なら

ぬ。勿体ぶつて何も秘傳、これも口傳など、口ばかり達者の師匠や、師に依頼せず自力で勉強せよなど、實は骨惜みの投げやり師匠の當世式利己式とは、全く雲泥萬里の差異がある。

魚勢と同じく明治末期の大坂素義界で、濫い世話物語りの名手と定評のあった、河合雷鬼翁の思ひ出話を、今一つだけ添へて置く。以下は翁から聞き書である。

師匠に手を取つて貰つた稽古人は、その上手下手にかゝはらず、皆その人の達し得る絶頂まで、イヤガオウでも練習させられます。決して半端なよい加減な所で「出来た」とは言はれませんが、ですから巧拙は別として、めいめいの腕相應に、皆が相當語れるやうになるのです。こうした風に個人々々について、それ相當に特別な稽古を付けて下さるのですが、非常なお骨折だと感謝の他はありませんでした。

私は生來鈍根で、沼津の稽古に、まゝ三年かかりました。重兵衛と平作との距離、これは至難でした。沼津以上に苦んだのは、お半長右衛門の帯屋で實に四年と七ヶ月かかりました。この

鈍根者を相手に、倦まずいらだたず、叱らず怒らずに五年近くも同一藝題の御教授は、根のよい、熱心な、親切、眞劍、更に斯道に忠實奉仕の師なればこそです。師匠も師匠ですが、私も私で、よく辛抱して勉強したものと、我れながら感心して自慢した笑話もあります。

笑ふといへば、アノ儀兵衛の笑ひの稽古ですが、師匠の笑ひが眞に逼るので、おかしくてもおかしくても我慢がならず、どうしても笑ひが止らず、覺えられぬので弱りました。その時師匠は、あなたは彌太夫の淨瑠璃を聴いてゐるつもりだからいけません、學校の教室で先生から修身の講義を受けてゐる生徒だといふ腹を忘れては困りますよと、師匠は決して怒つたり大きな聲で叱つたりはされません。いつもやさしく滑稽的に軽く訓戒されます。一例がお半が死に行く時、轉寢の長右衛門の枕元で「おちさん」と小聲で呼びさます時など、師匠は「コレ」とお半は幽霊ではありません」と、私の作りに聲に注意を與えられます。こんな風に皮肉な叱り方です。それが、怒鳴られるより、打たれるより、妙に腹の底

にドツシリと利きます。これは文太夫の津太夫さんや、六代目彌太夫の長子太夫さんなども、同じ經驗を持つてゐると、話合ふて頭を搔いたものです。

或る日のこと、この帯屋のお稽古をすまして後、二三商用で駆け廻つて夕方前、新町橋の辺まで参りますと、北浜の稽古場から堀江のお宅へお歸りのお師匠が、テクテク徒歩で來られるのと、バツタリ逢ひました。「今朝のお稽古の長吉の詞がむつかしくて、なかなか覺えられませんでした」と口をすべらすと、「ア、さよか、そんならモ一べん稽古しませう」と直ぐ跡へ戻らうとされますから、それはお氣の毒です、モウ堀江のお宅へ近いのですものと申しますと、「イ、エよろしい、あなたさへお差支へなかつたら、今日のうちにモ一べん稽古なさる方が、よく覺えられますから」と、折角お歸りがけの足を、又も遠い道を北浜まで戻られました。そしてこの日は二回のお稽古でした。どうです、何といふ眞實のある親切なお方でせう、こんなお師匠が又と一人あるでせうか……これを話される時に翁は泣いてゐられた。(筆者附記)